



「いつもお参りしているんですか？」

地井さんが声をかける。

「はい。先祖の供養もかねて——」

見るとお婆さんの手には、たくさん  
の1円玉が入った袋が握られている。

「これを88ヶ所全部にお供えしてい  
くんですよ」

「そうですか。いいところですねえ、  
本当に」

祠に刻まれた番号を88までたどる  
と、もう日和山公園は目と鼻の先だ。  
陶器でつくられた高杉晋作の像が、激  
動の幕末から140年を経た長州の街  
を見下ろしている。おなじように見渡  
してみると、海峡を背に林立するマン  
ションや「海峡ゆめタワー」が視界に  
迫ってきた。

「新しいものと古いものが共存できれ  
ばいいんだけどな。そうすれば街はあ  
たたかさを失わないのに」

それが、どれだけ難しいことかは  
地井さんにもわかっている。わかって  
いるけれど、いまやサーファーたちの  
メッカとなり、ひなびた漁村の雰囲気





れ小さな石仏がまつられている。ぴか  
 ぴかに磨かれているのではなく、かと  
 いった朽ち果てているわけでもない微  
 妙な具合が味わい深い。  
 「ひとつひとつ表情が違うね。これは  
 おもしろいな」  
 地井さんは石仏に手を合わせつつ、  
 急な坂道をのぼっていく。カサ、カサ  
 と枯れ葉を踏みしめながら道をたどっ  
 ていくと、地元の人らしいおばさんに  
 出会った。



絵 = 地井武男